HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「主婦」の誕生
著者	村上，淳子；MURAKAMI， Junko
引用	
発行日	2015-03

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

平成26年度博士論文要旨

「主婦」の誕生

村上　淳子

本論文は、明治期に新たに生み出された「主婦」という女性像が、如何なる時代の課題を担わされて登場し、明治・大正・昭和の日本社会においてどのような変容を遂げ定着したのかを明らかにし、理想とされる「主婦」像のあり方を検証していくことで、日本の近代化がもたらした世界を問い質そうとするものである。本論文の目的は、「主婦」の場から日本の近代という時代を照射することで、これまで見過ごされてきたものを改めて時代社会に位置づけて読み直し、日本の近代を捉える一つの方法を示すことにある。

第一章「「主婦」という言葉」では、明治期における「主婦」という言葉の登場を、翻訳書やその原典、英和辞典等の意味の変遷によりあとづけ、目指すべき「文明」の模範とみなされた十九世紀半ばのイギリス社会における理想を投影し、翻訳の背景に福澤諭吉を起点とする人脈が関わり、福澤の影響により生み出された可能性を指摘した。「主婦」は、漢語の意味に含まれる「本妻」「正室」という一夫一婦の概念に結びつく高い地位を備えた唯一無二の存在としての意味があり、「オクサマ」「ニョウボウ」、「妻」や「家刀自」などの従来の和語にはない感覚を持つものとして想起された言葉であった。

第二章「「家庭」の登場」は、「家庭」が一家団欒せる家族という精神的な側面での理想を説いた英語の「ホーム」の翻訳語として登場し、明治二十年代以降国家の基礎となる必須の要素と捉えられ、言葉の定着とともに「主婦」の意味づけが精神的な側面を重視したものへと変化し、「家庭」を築く要の存在であり「家庭」と不可分のものとして語られたことを明らかにした。一方、「家庭」という言葉が日常の言葉として定着したことは、精神的な意味が削ぎ落とされ、多様な家族のあり方を平準化させることを可能にするものであった。

第三章「「主婦」像の成立」は、明治二十年代以降盛んに出版された「重宝記」といわれるマニュアル本等の解析を通して、「国民」の創出という課題のもとで女性の位置づけが問われ、「主婦」としての女性像が「国民」に求められる教養の一つとして定着した経緯を明らかにした。「重宝記」は、新たな社会に即応するために求められる技術や作法などの情報とともに、旧世代から受け継がれるべき生活の知恵を説いたものであり、近代的価値とは異なるものを併置したものであることを提示した。また、明治三十年代以降、日本が世界に帝国として歩みを進める軌跡とともに、「主婦」が「一等国」にふさわしい「家庭」を築く存在との位置づけで説かれたことは、「重宝記」が単なるマニュアル本という側面以上に、

ある国家意思を先取りしたものとして国民の育成に地歩を占め、国家を底辺から支えるものとして存在したことを示すものであった。

第四章「「主婦」像の展開」は、「主婦」という女性像が社会に浸透していく上で大きな影響を及ぼした『主婦之友』の誌面や付録の「重宝記」の分析を通して、大正から昭和期にかけて「主婦」としての標準的な型が示され、「主婦」の理想像を皇后にまで敷衍することで、「主婦」という女性像があらゆる差異を包摂し溶解するものとして説かれたものであることを読み解いた。『主婦之友』が説いた夫婦の性愛に関する「秘訣」は、精神と肉体とが円満に一致するという近代的価値観のもとに説かれた「夫婦愛の神聖」という観念が、トータルな人間存在を分節化する近代という時代を象徴するものの一つであり、その解決を図るため説かれたものであることを提示した。そして、理想としての「主婦」像は、近代的な価値とは別個の時代の変化に左右されない普遍的な価値に基づき求められたものであり、本来「主婦」に込められた価値を見直すべきことを指摘した。

各章の解析により明らかになった点は、次の通りである。

「主婦」とは、時代社会の理想を盛り込むことが可能な言葉であり、多様な女性像を共通の理解が可能なものへと意味づける言葉として定着したのと同時に、新たな時代にふさわしい生き方を提示するものでもあった。「主婦」像には、近代的な価値意識のもと、新たな常識を吸収し世の中を乗り切ろうとする精神と、時代を越えて変わらずに存在するある精神の有り様に信頼を寄せながら生きる生き方とが、濃淡を帯びながら複雑に絡み合い、時に応じて新しい時代精神が色濃く見えたり、古き時代に逆戻りしたかのような色合いを見せたりしながら語られたことが表れている。この意味で「主婦」は、日本の近代が、近代的な価値とは別個なる普遍的な価値規範を求める相貌を持ちつつ、歩んだ時代であったことを映し出すものであった。

「主婦」は、近代の歩みの中で、各種要素に分節化された人間存在を、もう一度トータルなものとして取り戻すことが可能となる場でもあり、時代を越えて普遍的に存在する価値を備えた人間像を象徴するという側面もある。近代日本の女性は、「主婦」という理想像を求めることを通して、普遍的価値の下に生きるあり方に加え、幸せを見出す新たな価値観を求めた。「主婦」を通してある理想像を求める模索は、これからも続くものなのである。

（了）